

先日スリランカで発生した大規模な連続テロ、核兵器を保有する北朝鮮、東北から関東沖で30年以内にM7～8の大地震が起こる高い可能性—でも、日本は（私は）大丈夫と思っ
ていませんか。しかし、それはバイアスのせいかもしれません。

古い事件ですが、会計事務所で働いていたホプキンズは男性にもまして有能でしたがパートナーになるのが遅れていました。その理由は、彼女が「もっと女性らしく歩き、もっと女性らしく話し、もっと女性らしい服装をし、化粧をし、髪の毛をスタイルし、宝石を身に着ける」必要があるからというもので、ホプキンズは女性差別だということで訴訟を起こしました。事務所側はそれ以外の理由を立証できなかったため、裁判所は女性差別を認定しました (*Hopkins v. Price Waterhouse*, 825 F.2d 458 (D.C. Cir 1987))。女性差別に関する代表的な事件ですが、このような差別は、「女性」に対する固定観念、認識バイアス、に基づいています。

このような認識バイアスは「人間の判断・認知・意思決定などにしばしば紛れ込む恣意的な傾向」（実用日本語表現辞典）のことで、日常のいたるところで見ることができます。それは、人間の脳はいかなる瞬間においても1100万もの情報で溢れており、その瞬間に処理できるのは僅か40の情報にしか過ぎないため、大量の情報で溢れている脳が「素早く情報を処理し意思決定をするために自動的、知的ショートカット」(<https://rework.withgoogle.com/subjects/unbiasing/>)として、過去の経験やその人の固定観念等に基づくバイアスを使う必要があるためと思われま

す。背の高い人の方が収入が多い、ブロンドヘアーの人の方が経済的援助を受けやすい、同じ履歴書でもアフリカ系アメリカ人の名前(Lakisha, Jamal等)の場合はそうでない場合に比べ採用されにくい、女性シェフは男性シェフよりも給料が28%少ない、女性医の収入は男性医の収入の71%に過ぎない、女性弁護士の収入は男性弁護士の82%に過ぎない、等バイアスが関与していると思われま

す。バイアスを除くいろいろなトレーニングがあるようですが、自分の認識・判断にはバイアスがかかっている可能性があることを認めそれを意識し、意図的に改善していくことでバイアスを低減することができるよう

です。さて、特許出願の審査においても、審査官は数年前に出願された発明を審査するので、現時点での技術に照らして評価しないように、即ち、発明性をバイアスなしで審査するため、審査官は、発明がなされた（出願がされた）時点まで思考を意識的に遡及させて審査しなければならないことになっています。また、審査するときには出願明細書を既に読んでおり、即ち、発明の種明かしを見た後で発明性について審査するので、後知恵バイアスが生じないようにすることも求められています。

（上記は一般論又は個人的見解で、個々のケースでの法律アドバイスを目的としたものではありません。また、バイアスがかかっています。）